唐丹の歴史いろいろ（六）

三陸町吉浜
木村正継

三閉伊大一揆　唐丹に越訴（二）

の事件の同時期の六月三日午後五時にペリーの率いるアメリカ東インド艦隊の蒸気船サスケハナ号とミシシッピ号それに帆船のプリマス号サラトガ号が浦賀沖に停泊した。

江戸に三閉伊一揆の詳しい情報が入った頃には、その対応に追われている状況でした。

通常であればこの事件は南部藩の存亡に関わる大事件だったが、このような訳で幕府は、あまり厳しい処置は考えなかったようです。

この一揆で活躍した三浦命助は、一八二〇年（文政三年）栗林村の肝入の家に生まれ、代々の名前は、六右衛門といい、命助とは一揆に加わった時の名前であると本人が言っています。

指導者　三浦命助

初めは、一揆の代表者として記録等に出てきませんが指導者は、極力名前を出さないようにしますし、この一揆の時だけ命助という名前を使用したこと、代表四五人が残る際に、六月二五日付の契約書で盟助殿・太助殿・喜蔵殿代表三人宛てに命を奪われた場合の家族への保証が年十両づつ十ヵ年子孫に支払うことになっていた事を考え合わせると目立たないようにしていたが初めから指導者の中でも中心的存在だったとも考えられます。

命助は「栗林村集会露見状」で一揆の内幕と自分の行動などを公開しました。しかし悪評は変わらず一揆の責任を一人でかぶった形になってしまいました。

村を出て、安政二年十月七日に実兄が住職をしていた仙台領加美郡四日市場村の積雲寺に入りました。

積雲寺から箆峰寺に移って翌三年には小牛田の修験道当山派の「東寿院」に落ち着いた。

ところがこの寺の住職が病弱なため命助が代わって修験者・明英となる。

この寺が伊達一門亘理氏の「家中寺」になったのを転機に本山醍醐寺の承認を得て「東寿院明英」となる。

そのってで京都二条家の家来になることが出来たようです。（三浦命助伝）大小の刀を差し、槍一筋と挟み箱を持つ二人の共を連れて平田番所に差しかかった。

番所役人の下番が大槌の者で命助と気付いてそのまま番所を通し、その夜甲子村の命助の泊まっている宿に押しかけ捕縛しました。

安政四年七月二四日盛岡長町の牢屋に入牢。子孫や親戚宛て大福帳に色々遺書を残しています。

子孫の将来の生計の立て方、薬の作り方そして、この一揆の内幕が詳しく書かれた「露見状」によって詳しい事情がわかります。

最後に、多くの書き物の中から南部藩の人々の為に書かれた言葉を二つ抜粋します。

「人間と田畑をくらぶれば、人間は三千年に一度さく　うどん花（げ）なり

又、内密の取り扱いを依頼された仙台藩でも、初めは内々にとの考えも有ったようですが、途中から南部藩の不誠実な対応に事を公に取り扱うことにしたようです。

一説には、仙台藩でも三閉伊を自藩の領土にしようとの動きもあったとする説もあります。

一揆勢の主要な希望でも有り、十分あり得ることだと思います。江戸では、こ